

SPECIAL FORUM REPORT 014

明治維新と日本の開国

「グローバルな文脈での日本」
第14回/2018年10月26日

「近代日本の『長い革命』—19世紀日本における『文明』の追及について再考する

(‘Long Revolution’ in Modern Japan: Rethinking the Search for Civilization in Nineteenth-Century Japan)

————— 荻部直 (東京大学法学部教授)

明治維新は日本の歴史の中で、もっとも大きな事件の一つである。近年の日本研究では、この明治維新を“the Meiji Revolution”と表現する例が散見されるようになってきた。確かに、皇室は徳川時代から近代に至るまで存続しているし、20世紀の共産主義革命に見られたように、従来の私的所有の経済制度が解体されたわけでもないが、明治の新政府が行った諸改革は、単に“political change”という言葉では説明し尽くせない。1868年から1890年ごろに至るまでの間に、武士を支配階層とした世襲身分制が解体され、合法的な官僚制と議会による支配が成立し、成文憲法に基づく法制度が確立し、土地に関する私的所有権が導入され、経済が資本主義へと移行していった。こうした実態を踏まえて、福澤諭吉や竹越與三郎らの明治知識人は、「革命」すなわち“Revolution”の語を使ったと考えられる。

だが、日本に関する知識のある英語圏の人々にとって親しいのは、“Revolution”ではなく、“the Meiji Restoration”という呼び方であろう。しかし“Restoration”は本来、君主制が復活することをしか意味せず、「革命(revolution)」が指し示す大きな変化を捉えることができない。それではなぜ、“Restoration”という呼び名が採用され、定着することになったのか。それは、1868年の政権交代の直後に、明治の新政府が諸外国に対してそう名のつたからである。新政府

は、6か国の公使に明治天皇による国書を手渡し、国交を結んだ。これは「大政復古布告の国書」と題されており、当時の新政権は、徳川政権を倒し、天皇を中心とする政府を復活させるという名目によって、自らの正当性を諸外国に説明したのである。“the Meiji Restoration”という名称は、そうした新政権のイデオロギーを反映していた。

しかし、新政府自身が国内向けに出した“Restoration”の布告は、単に古い支配体制の復活という意味だけを提示するものではなかった。むしろそれは、“Restoration”の名目のもとに、実際上は新たな諸制度の創立を正当化するものだったのである。1868年、明治天皇の名による「大令」と題された文書が發布され、その中で天皇は国民に対して、徳川幕府の廃止と「王政復古(Restoration)」を宣言している。しかし、その“Restoration”の内容としてこの「大令」が示しているのは、「諸事、神武創業の始めに原づき」という方針であり、これは徹底した大改革を正当化するものとして機能していた。「神武創業」の言葉が、“Restoration”と“Revolution”をつなぐ役目を果たしたのである。

この“Revolution”の内容から、一つの謎がわきあがってくる。明治維新を主導し、徳川政権による統治機構を一掃したのは諸藩の武士たちである。彼らは、政権を握った後、江戸時代に安定性を保っていた身分制を廃止した。これは、新政



権の支配者が、自らの出身身分を解体してしまうことを意味し、「身分としての自殺」と言える。

福澤諭吉は著書『文明論之概略』の中で、1868の政権交代を「革命 (revolution)」もしくは「王制一新 (reform by monarchical power)」と呼び、1871の廃藩置県とは別の事象として取り上げている。すなわち、徳川政権を廃止した後に、天皇に諸大名が家臣として仕える制度にし、武士の身分的特権は維持するという選択肢もあったのである。福澤は、19世紀の初頭から、世襲制度に対する不満が社会の広い階層のうちで高まっており、それが1868年の革命につながったと指摘する。彼の見るところでは、武士たちの倒幕運動は、この不満が具現化したものだったのである。したがって、それが廃藩置県に進み、身分制解体にまで行きつくのは必然であった。この長期にわたる社会の変化を、レイモン・ウィリアムズの著書のタイトルを借りて、「長い革命 (Long Revolution)」と名づけることができるだろう。

竹越與三郎は著書『新日本史』において、徳川時代における市場経済の目覚ましい成長が百姓・町人の富裕化と知的水準の上昇を支え、地位を高めたことを指摘している。同時期に、日本では出版事業が発展し、知識の普及を容易にした。また、豊かになった町人や百姓が学問の需要層となり、さまざまな学問の発展と普及を支えていった。その中で儒学、とりわけ朱子学の政治哲学が、庶民にまで普及したことに竹越は注目している。儒学が前提とする政体は君主制に限定されているが、そこでは君主が人々の要求を真剣に受け入れることが肝要とされている。さらに、朱子学においては、仮に君主が恣意的な統治を続けた場合、徳の高い人物が反乱を起こしてその君主を追放し、自ら君主となって新たな王朝を始めることも許される。竹越は、こうした考えが世襲制に対する不満と結びつき、武士による革命運動を支えたと説明している。

「公論」という概念が、この趨勢を表す一例となる。1852年、横井小楠は宛てた政策提言の中で、大名による地方政府において「公論」のための機関を作ることを提案した。後に横井は、儒学の理想に照らし合わせて、西洋の議会制度を一つの理想的な機関として高く評価した。このような評価はさまざまな政治勢力に共有され、その結果、明治維新によって成立した新政府も、1868年4月に発布した「国是」の冒頭で、「広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」と宣言することになる。そして1890年には帝国議会の開設を見た。

19世紀における日本の近代化は、しばしば「和魂洋才」という言葉によって特徴づけられる。しかし、当時の日本の知識人は、単に「技術 (才)」としてのみ西洋文化を理解し、受容したのではない。むしろ、日本の伝統的な価値観に

照らして、西洋の文化に評価できる点があったからこそ、輸入したのである。この現象は、サミュエル・P・ハンチントンの言葉を借りて「文明という共有物 (Commonalities of Civilization)」と呼んでもいいだろう。彼は著書『文明の衝突 (The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order)』の中で、大文字で単数形の “Civilization” を小文字の “civilization” と区別した。この大文字の “Civilization” は、特定の地域に広がった様々な文化 (小文字の “civilization”) によって共有されるべき普遍的な価値であり、これを手がかりにして対話と共存を図ることの重要性をハンチントンは説いた。

19世紀の日本人が西洋に見いだしたのも、恐らくはこの「文明という共有物」の存在であろう。当時の日本人は、自分たちとまったく異質な文化と思っていた西洋諸国の中に、自分たちの文化と共有可能なものを見だし、それを受容しようと試みた。そうした異文化の中に「共通性」を発見し、それを手がかりに対話を希求する姿勢が、今日のグローバル時代において益々重要になっている。

プレゼンテーションに続いて、司会者が近年の日本における「明治維新」の理解は、司馬遼太郎の作品に大いに影響を受けており、それが学術的なエビデンスに基づく理解の普及を難しくしている、と指摘した。これらを受けて、指定討論者はグローバルヒストリーの観点から、明治維新は単純に日本社会内部の出来事としてだけでなく、政治、経済、テクノロジー、文化等を含めた幅広いグローバルなコンテキストの中で解釈する必要がある、とコメントした。具体的には、1870年代は世界的な景気後退があった時期であり、折よく各国の社会変動と重なることで、日本を含む世界各地の政治経済に影響を及ぼしたことを強調した。また、「リヴァイアサン2.0」の概念に触れながら、19世紀後半に国民統治のための行政制度・テクノロジーが発達することで近代国家が勃興したことを紹介した。さらに、日本と他国を比較すると、朱子学に加えて封建と武家支配が日本社会の変革を理解する上で重要な特徴であり、また経済の観点からは、明治維新以前から人的資源の蓄積と共に二重経済が発展していたことを指摘した。関連して指定討論者は、高い識字能力を含む文化的な側面が、正確性と表出・再現性を必要とする進歩・発展を下支えする重要な役割を果たしたとの認識を示した。コメントを踏まえて、荻部氏は議論を発展させ、「revolution」という単語は第二次世界大戦後に共產主義

革命を示すものとして使われていた経緯もあり、アカデミアでは明治維新の英訳としては好まれなかったことを紹介した。

司馬の影響力に関連して、参加者から、明治維新に関する客観的な理解を広めるためにはどうすればよいか、との質問がなされた。荻部氏は、皆が司馬の本を読むのを止めればよい、と笑いを誘った後、例えば坂本龍馬のような特定の武士による働きを過剰に評価するのではなく、大名を含めて様々な関係者が果たした役割を冷静に見つめることの重要性を強調した。これに対して指定討論者も同調し、様々な学問分野・領域の知見を統合しながら歴史を解釈していくことが肝要であるとの見解を示した。

続いての質問は、1868年に明治維新が起こってから1890年に帝国議会が創設されるまで、なぜ20年以上という長い期間が必要だったのか、というものであった。荻部氏は、江戸時代の身分制が非常に強固であったことを考えると、20年というのは決して長い期間ではなく、むしろ非常に短期間であったとの認識を示した。その上で荻部氏は、このような短期間での社会変革が可能となった背景には、朱子学が存在があったことを強調した。

続けて他の参加者から、福澤以後の歴史家が果たした役割と、明治時代に戦争のために当局から課せられた経済的負担を当時の日本人がどのように許容したのか、という点について質問が寄せられた。併せて、同参加者からは、柳田国男が著したような日本国内のローカルナリアリズムにも着目することの重要性が提起された。これに対して、荻部氏は第二次世界大戦後の日本ではマルクス主義の影響が強かったことを改めて説明し、また指定討論者はローカルナリアリズムに目を向ける上で特定のアプローチに固執しては全体像を描き出せないため、研究分野・領域を超えて知見を共有し合うことの必要性を訴えた。

次の質問は、立憲君主制の再建を図る他国に対して、明治維新がどのような示唆を与えるか、というものであった。荻部氏は、模範的な立憲君主制の中核となる考え方は、君主が憲法に従うことであると強調し、ブラジル、ジョージアなどで昨今見られるような君主制再建の動きには、こうした考えが欠けているのではないかと懸念が表明された。

続けて、司馬などによって作り出された典型的な明治維新像を維持・強化する上でマルクス主義者がどのような役割を果たしたか、またマルクス主義者が若い歴史学者に対してどのような影響を与えたか、との質問が参加者からなされた。重ねて、同参加者は女性が人権に関する議論から排除されてきたことを踏まえて、近代日本において平等がどのように拡大していったのか、という点について質問した。荻部氏は、

欧州諸国に比べると、日本においては女性の人権が速く拡大していったものの、確かに男尊女卑や他の差別的な考え・制度が現存しているとの認識を示した。また指定討論者は、人権の具体的なあり方は社会によって異なっており、特定の属性を有する人が恣意的に包摂／排除されていることを踏まえ、人権の拡大を普遍的なものと捉えることについて警鐘を鳴らした。

続いての質問は、「身分としての自殺」のような急進的な改革が1868年当時になぜ可能であったのか、というものであった。荻部氏は、朱子学の普及が重要な役割を果たしたことを改めて説明し、加えて司会者からは、当時多くの藩が長引く不況によって倒産の危機にあり、またストレスの大きい慣習に嫌気が差していたため、伝統的な制度を放棄することに前向きであったとの説が紹介された。

次に、戊辰戦争の「勝者」と「敗者」で明治維新に対する理解がどのように異なるか、という質問に対して、荻部氏は明治期の自由民権運動が主に戦争の「敗者」によって推進されたことに触れながら、「勝者」と「敗者」の双方に目を配ることの重要性に同意を示した。これを受けて司会者からは、明治維新後の新政権では、「敗者」が新たなシステム、とりわけ軍にスムーズに取り込まれたことで、円滑な移行が可能となったとの解説がなされた。

最後に、2018年が「明治維新150周年」であるにもかかわらず、記念行事等が盛り上がっていない理由についての質問が寄せられた。荻部氏は、維新60周年は盛大に祝われたことを紹介した上で、現代の日本人にとって明治維新は祝賀するには古すぎる出来事であるとの見解を示した。また、参加者からは、都道府県レベルでは記念行事等が行われているが、その規模等については各自治体によって異なることが紹介された。

「徳の思想劇：内戦の敗者と犯罪者をめぐるトランスナショナル・ヒストリー」

The Play of Virtues: A Transnational History of Revolutionary Civil War Losers and Criminals

——— ショウ・コニシ（オックスフォード大学歴史学部准教授・日産日本研究所長）

本稿は、日本における内戦の敗者、及び彼らと西洋近代史の敗者との地下でのトランスナショナルな関係に焦点を当て、新しい思想史を描き出すことを目的とする。具体的には、正教会を手がかりに新たな概念枠組みとトランスナショナルな連結性を提示し、従来の近代日本史ではほとんど触れられないことのない人々を浮かび上がらせるとともに、近代日本思想史の転換を図る。

明治維新の「敗者」である懷徳堂は、明治期に入ってから正教会の神学校として存続した。実際、正教会は徳と中国古典哲学を教えるため、懷徳堂の図書館・資料館を念入りに維持・活用していた。恐らく従来の文明論やリベラルな論壇において「近代」史を学んだ人にとっては、懷徳堂が内戦の敗者の中で息づいていたという事実は驚愕に値するだろう。さらに、その正教会内の懷徳堂思想精神が明治期の日本においてロシアの正教会が破門したトルストイ主義の普及に一役買ったという事実は、さらに驚くべきことだろう。これらの実態を明らかにするため、以下では翻訳と改宗によって彩られた徳の概念を巡る三部構成の思想劇を描いていく。

正教会が初めて明治維新时期の日本で広まったのは、北部の脱藩志士の間であった。彼らは、函館において蝦夷共和国が新たな近代国家からの独立を宣言した際、正教会に改宗した。ニコライが最初の改宗者に出会ったのは、内戦後の混乱期、「反逆者」共和国の拠点である革命の地・函館においてであった。脱藩志士の地下組織を通じて秘密裏に、正教会は革命戦争の敗者の中で広がっていった。新政府が依然としてキリスト教を禁じていた間、彼らの活動は政府の監視から逃れていただけでなく、歴史学者の目からも逃れていたの

ある。ニコライは、彼が改宗させようと考えていた反逆者や革命家から逆に影響を受け、日本における布教活動にグローバルな観点から独自の意味を見出していた。多くの西洋人が曖昧で時に逆進的な行動をとる中で、彼は明治維新（Revolution）を新たな進歩的な時代の幕開けと捉え、改宗者に対して新たな歴史観を提示し、他方で明治維新を支えたイデオロギーに関わる歴史書を通読した。犯罪者ネットワークで共有された知見を手がかりに、正教会は日本において、明治の

「上からの改革」からは逆流する形で広まっていったのである。この知識の逆形成が進む中で、大阪の敗者である懷徳堂が北部の敗者集団と交わることになる。彼らは、庶民が日常生活で実践する徳に価値を見出し、国家中心の西洋文明のディスコースで語られる世界観に疑問を呈した。これらの人々とニコライとの出会いが、徳の思想劇・第一幕である。

ここで、三つの重要な要素が浮かびあがる。懷徳堂を代表する存在である中井木菟麻呂と中井終子は、日本正教会の熱心な信者となり、彼らが主導する形で、東京正教神学院は革命に関わる歴史書を使って歴史と史実性を教育した。中井木菟麻呂は、脱藩志士が読み、依拠した歴史を使い、1800年代の革命運動を広く共有した。内戦の敗者による非国家的な動きの中で、ニコライ堂神学校は懷徳堂が受け継いできた徳の思想と出会い、明治期の寡頭制に対する批判的な動きと歩調を合わせていく。これらのエリートたちは内戦時に激しい戦いを展開しており、中でも北部で正教会に改宗した人たちは直にそれを経験していた。ニコライ堂としての懷徳堂は、ナロード（民衆）の間で普及していった。ニコライは、日本の一般大衆の識字能力が高く、革命や進歩に対する意識が高いと考え、薩摩や長州出身の寡頭政治エリートと区別して捉えていた。徐々に、ニコライ堂のアイデンティティは、寡頭政治エリートの子が改宗していったプロテスタントとの差異という形で形成されていった。

後に東京正教神学院の校長となる小西増太郎は、このニコライ堂における知識形成を体現していた。小西はトルストイと毎日、ロシアにあるトルストイの私邸で老子の『道徳経』をロシア語に翻訳した。日本において西方教会が、西洋文明のディスコースにおいて生み出された言葉である宗教と同義で捉えられていた時期に、小西は宗教の意味を再定義し、「誰もが」実践することのできる「徳としての宗教」という考えを打ち出した。彼の尽力によって、トルストイは日本でもっとも広く読まれた外国人作家となった。この事実はまた、日本人が（西洋人と異なり）トルストイの小説ではなく宗教・哲学に関する著書を好んで読んでいたことを裏づける。小西がトルストイを紹介したことによって、キリスト教が他のすべての宗教と同列に位置づけられただけでなく、他

の宗教と共有している中核的な価値が表出されたのである。小西は、『道徳経』で示された徳の概念を、トルストイの作品を通じてさらに発展させ、帝国日本のイデオロギーと西洋モダニティを批判的に捉え直した。これが、徳の思想劇・第二幕である。

この宗教観の転換から、徳の思想劇・第三幕が始まる。小西によるキリスト教の捉え直しは、西洋を倣って構築された国家の発展を道徳的に下支えしてきた権威的な宗教観を根底から覆したいと考えていた日本人の琴線に触れた。これによって、「宗教意識」は当時の日本において流行し、改宗という共通経験に弾みをつけた。それは、近代の個人概念とは異なる形で新しい自己の構築を可能とし、広く民衆が新たな未来社会の構築に関与する下地を提供した。ここにおいて、明治期の日本で宗教と道徳のディスコースが交わったのである。

内戦と革命の敗者によるトランスナショナルな連結性に着目することで、本稿は近代日本に関する従来の歴史的解釈（キリスト教とそれが想定する改宗者の西洋化が、明治後期の日本における政治・社会秩序に抗う批判的立場の素地を提供した）に一石を投じている。キリスト教は、日本を内側から文明化することを企図していた。しかし、トルストイ主義の宗教において、西方教会のモダニティは批判の源泉ではなく対象であった。そのため、本稿で示した宗教概念は、西洋形而上学やモダニティを意味するものでは決してない。むしろそれは、人の道徳コミュニティの行く末を規定する「宗教」なるものの好ましからざる意味に終止符を打つものであった。こうした再構築が、帝国明治や西洋モダニティの文化・イデオロギーから自由になることを可能としたのである。翻訳を思想史と捉えるとき、ここでは国家レベルでの国際関係史と対蹠的な方法で思想史を描く方法論的戦略が必要である。従来の歴史的解釈は翻訳理論を文化ナショナリズムか、自己植民地化のプロセスとして理解してきた。それは翻訳交渉史を国際関係史における東と西、英語と日本語、文明と非文明の二極で見てきた事にも所以する。事実ここに見た思想史はそういった二極化が支えた近代性自体を覆すものだった。歴史家のたよる翻訳理論自身がここで見てきた二極間の外で地下に展開された豊かな非国家レベルでの近代日本のトランスナショナル思想史を排除する結果を生んできたとも言える。

12世紀、ベネディクト会・女子大修道院長 のHildegard von Bingenは“the Play of Virtues”を執筆し、男性が圧倒的に支配的な教会において女性としての主張を訴えた。“the Play of Virtues”と同様に、本稿で示した歴史は、我々が19世紀の支配的な西洋文明ディスコースにおいて想定してきた

枠組みから外れた人々によって生み出されたものである。彼らはまた、エリート層や明治期の寡頭制権力者の圏外にあった。それでも、Hildegardが描いた女性の宗教劇がオペラの黎明期に名を残したように、文明化や国家統合のための「内戦」という政治的なディスコースによって市民権をはく奪された敗者や犯罪者もまた、近代日本におけるトランスナショナルな文化・思想のステージにおいて、重要や役割を演じていたのである。

プレゼンテーションに続いて、指定討論者は初めに、コニシ氏の研究は通説（受動的で画一的な日本社会が、西洋諸国からの強い外圧によって「開国」した）を覆す重要な内容であることを強調した。トルストイが白樺派に影響を与えたこと、また彼が後にアナキストとして国家や私有財産を否定したことを念頭に、指定討論者はトルストイ主義と日本の賛同者が実際の政治や政体に与えた影響、ニコライ堂と懷徳堂の関係が日本外交に与えた影響、さらに懷徳堂と正教会の関係がどのように終焉を迎えたか、という点について質問した。また、日本で取り入れられた正教会が他国における宗教観・実践に与えた影響について、とりわけ徳としての宗教という概念が日本のみにとどまっていたのか、あるいは他の社会にも波及していったのか、との論点を提示した。重ねて、「西洋モダニティ」の具体的な意味と、それが日本の中で西洋文化に触れる以前から存在していたか、また内戦の「敗者」がそうした西洋のモダニティをどのように排除／受容したのか、という点について問いかけた。その上で、指定討論者は、「モダニティ」を論じる際に「西洋」と「その他」を区別することの意義についても質問した。

これらの質問を受けて、コニシ氏は西洋と他のモダニティを区別することは依然として有意義であるとした上で、西洋モダニティとは、具体的なあり方は多様であるものの、主権、科学技術、合理性、キリスト教、自然からの脱却、男性・白人優位主義などを包含した大きな進歩・変化についての考え方であると定義し、これらの要素は、必ずしも他のモダニティ概念に含まれておらず、例えば「アナキスト・モダニティ」は自然と文化を共生するものとして捉えることを指摘した。コニシ氏は具体例として農業大学を挙げ、そこでは西洋モダニティの考えに基づいて、男子校制度、英語・科学技術・合理性の学習、キリスト教への改宗、軍事教練などが具現化していることを紹介した。また、日本化された宗教概念の影響については、さらなる研究が必要であるものの、日

本が「西洋化の成功モデル」として考えられ、且つ「西洋」なるものに対する理解を一層深める役割を果たすことが期待されていたことを踏まえれば、他地域においてもドミノ効果が生じていた可能性があるとの認識を示した。さらに、ひとたび西洋モダニティに関する批判的なディスコースが展開されれば、従来の解釈とは大きく異なる歴史が描かれる可能性について言及しつつ、その対象となるような史実は公の場ではなく秘密裏に展開することが多いため、それらを明らかにするための研究手法を精緻化していくことの重要性を強調した。加えて、トルストイと正教会の影響については、小西増太郎が（私有財産を享受していたトルストイと異なり）ニコライを真の実践者として高く評価していたものの、小西はニコライから冷遇されていたことを紹介した上で、トルストイ主義とクロボトキン主義の密接な関係が少なくとも日本の知識人の間で大きな影響力を有し、共生思想や科学技術、ダーウィニズムなどの展開に一役買ったことを指摘した。最後にコニシ氏は、ファールルの『昆虫記』が大杉栄を含むアナキストによって邦訳されていた事実を鑑みれば、この種の進歩に関する考えとアナキズムが結びついていたことを理解できると述べた。

続けて、参加者からトルストイが与えた政治的な影響を問われると、コニシ氏は「政治的」の定義によらず、仮に政党の結成・活動という意味であればトルストイの影響はほとんど見られないが、アナキストの活動に対しては重要な役割を果たしていたことを指摘した。また、徳富蘇峰の影響に関する質問を受けて、蘇峰のトルストイも一つの受容形式であったであろうと賛成したあと、しかしながら哲学、文学、芸術を含め文化思想史全般においては、むしろ『順礼紀行』を著した徳富蘆花の方が象徴的であるとの認識を示した。

他の参加者から、「敗者」にとってキリスト教は魅力的であり、それゆえ改宗する動きが見られたのではないかとのコメントが寄せられると、コニシ氏は「敗者」やキリスト教を取り巻く歴史的なコンテキスト、及び特定のキリスト教宗派に付与された意味づけは多種多様であるため、キリスト教は必ずしも「敗者」の救い主として解釈する必要はないと答えた。とはいえ、各地の歴史をつぶさに見ていくと、何らかのパターンが浮かび上がる可能性に言及しつつ、ニコライのアプローチは他のキリスト教会とは異なり、日本人を「文明化」する対象として捉えるのではなく、日本文化自体を高く評価していたことを改めて強調した。

これまでの議論を踏まえて、社会实践に対する示唆を問われると、コニシ氏は著名な作家・アナキストである有島武郎を代表例として取り上げ、彼の父親は資本家で北海道に広大

な土地を有していたが、有島は実践者として資本主義に反発し、小作人を解放して自身の土地を相互扶助精神を道義とした共生農場とし、これが後に多数の協同組合につながったことを紹介した。

次に、ニコライが今日の宗教に与えた影響は限定的であったとのコニシ氏の見解を受けて、他の参加者から、なぜトルストイが日本において影響力を失ったのか、また進歩、文明、キリスト教といった概念で特徴づけられる「西洋モダニティ」が現代のグローバル社会においてどのような位置づけ・意味を有しているのか、との質問がなされた。コニシ氏は、トルストイは影響力を失ったわけではなく、日本におけるトルストイ（主義）の使い方が歴史的なコンテキストの変化に応じて移ろいでいるだけであるとの認識を示した。また、現代社会においては様々な考え方や価値観が存在しているが、「何かしら間違っている・不十分なものがあり、それを改善していかなければいけない」という考え方自体は「西洋モダニティ」における普遍的な価値として息づいていることを指摘した。

最後に司会者が、本研究会における議論は、日本人研究者が主に日本語で日本の読者に向けて行っている研究と、英語やロシア語などの他言語で展開されている研究のギャップを埋める試みでもあり、「グローバルな文脈での日本」を捉え直す上で小さいながらも重要な一歩であったと締めくくった。

(翻訳 荒木啓史)

グローバルな文脈での日本 明治維新と日本の開国

2018年10月26日

於 オックスフォード大学セント・アントニー・カレッジ

報告者

- ・ 荏部 直（東京大学法学部教授）
- ・ ショウ・コニシ（オックスフォード大学歴史学部准教授・日産日本研究所長）

プロジェクトディレクター

- ・ 田所昌幸（慶應義塾大学法学部教授）
- ・ デイヴィッド・ウェルチ（ウォータールー大学バルシリー国際関係大学院教授）

プロジェクトコアメンバー

- ・ 荏谷剛彦（オックスフォード大学社会科学部・日産日本研究所教授）
- ・ 渡辺 靖（慶應義塾大学環境情報学部教授）

参加者

- ・ 五百旗頭薫（東京大学大学院法学政治学研究科教授）
- ・ ヒュー・ウィットカー（オックスフォード大学日産日本研究所教授）
- ・ 筒井清輝（ミシガン大学日本研究センター所長）
- ・ 彦谷貴子（コロンビア大学ジェラルド・L・カーティス准教授）
- ・ アンガス・ロッキヤー（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)講師）

サントリー文化財団

- ・ 尾崎勝吉（専務理事）
- ・ 前波美由紀（事務局長）
- ・ 山内典子（上席研究員）
- ・ 大栗佳奈（研究員）



菊部 直 (東京大学法学部教授)

1994年、東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。博士(法学)。専門は日本政治思想史。主な著書に『光の領国 和辻哲郎』(岩波現代文庫)、『移りゆく「教養」』(NTT出版)、『安部公房の都市』(講談社)、『丸山眞男—リベラリストの肖像』(岩波新書、2006年、サントリー学芸賞)、『「維新革命」への道—「文明」を求めた十九世紀日本』(新潮選書)など。



ショウ・コニシ

(オックスフォード大学歴史学部准教授・日産日本研究所長)

専門は思想史およびトランスナショナル・ヒストリー。著書に *Anarchist Modernity: Cooperatism and Japanese-Russian Intellectual Relations in Modern Japan* (Harvard University Asia Center, Cambridge, MA 2013)。論文に ‘The Emergence of an International Humanitarian Organization in Japan: The Tokugawa Origins of the Japanese Red Cross’ *The American Historical Review* (October 2014)、‘Translingual World Order: Language Without Culture in Post-Russo-Japanese War Japan’ *Journal of Asian Studies* (February 2013) など。



The Meiji Ishin (‘Meiji Restoration’) and *Kaikoku* was co-sponsored by the Nissan Institute of Japanese Studies, University of Oxford



国際研究プロジェクト「グローバルな文脈での日本」は、研究者や実務家が政策を意識しながら日本の社会学的研究を進める海外ネットワーク Japan Futures Initiative と提携しております。詳細はホームページをご覧ください▼
<http://jfi.uwaterloo.ca>



JAPAN FUTURES INITIATIVE
日本の未来プロジェクト
Hosted by the University of Waterloo・ウオーターラー大学主催